

# 帝国主義・帝国・覇権主義 補論

河 合 恒 生

1. 渡辺治の帝国主義論
2. ネグリとハートの「帝国」論
  - 2-1. 帝国の土台
  - 2-2. マルチチュード
  - 2-3. 帝国とは
  - 2-4. いくつかの問題点
3. ウッドの「資本の帝国」論

## 1. 渡辺治の帝国主義論

拙稿「帝国主義・帝国・覇権主義」において、私は、現代は帝国主義支配が不可能になった時代であり、覇権主義の時代だとした。一方、渡辺治は、その著書『講座現代日本Ⅰ 現代日本の帝国主義化 形成と構造』で帝国主義論の必要性を強調していた。

冷戦が終結したにもかかわらず、アメリカを中心とする北側大国はグローバルな軍事展開をやめず、世界経済においては貧富の格差を再生産しており、そのような現実には帝国主義論的視覚が必要だと渡辺はいう。渡辺のいう帝国主義論的視覚とは、レーニンの帝国主義論の視覚である<sup>1)</sup>。

渡辺は、アメリカ帝国主義一国が軍事的にも生産力的にもぬきんでた力を持ち、帝国主義世界は、アメリカを盟主とする階層的な支配・従属関係のもとに編成されているという。巨大な資本蓄積を達成し、新たな独占資本の形

態である多国籍企業形態を生みだし、新たな市場を貪欲に求めていたアメリカ資本が主導して植民地体制を解体し、「開発帝国主義」を推進したために、フランスやイギリスも多国籍企業展開を強いられたと渡辺は主張する<sup>2)</sup>。

一貫して、アメリカ資本の主体的強さが強調されている。しかし、第二次世界大戦中に植民地諸国で発展した民族独立運動の前進、そしてそれを支える世界的な民主主義擁護の戦い、「社会主義」世界の発展等々は第二次世界大戦後の世界のあり方に決定的な影響を与えたことは否定しがたい。この力は、1970年代前半まで圧倒的力をもって、アメリカをはじめとする先進資本主義諸国の「帝国主義的」政策の展開に歯止めをかけてきた。植民地体制を解体したのも、戦後のこの三つの力による。この力と対抗し、この力による包囲網を打破するための活路として、資本は多国籍化を推し進めざるをえなかった。この資本の動きは、アメリカ帝国主義の強さの発現ではなく、個人という観点からも、国家としての観点からも、より強力になった人類世界全体への対応として生じている点を見逃すべきではない。

もはや植民地として支配することができなくなった世界での資本の活路は多国籍企業化であった。したがってアメリカ帝国主義が主導的に植民地体制を解体したとの捉え方は、アメリカの力の過大評価につながる恐れがある。そのため、多国籍企業化によってもたらされた80年代以降の資本の巻き返しと「社会主義」の崩壊を評価する際に資本の力の過大評価につながりはしないか。

70年代後半からはじまった新自由主義の席卷と80年代末からの「社会主義」の崩壊は、第二次世界大戦後に生じた個人や諸国家における民主的力の強化の中で生じている。「社会主義」の崩壊は、まさに個人においても、国家においても、民主的力が前進していることの現れであった。新自由主義の席卷も、70年代前半まで、いわゆる「第三世界」を支配してきた集団の非民主的、従属的政策の破綻によるものであった。

第二次世界大戦後に帝国主義的動向を阻止してきた勢力には、さまざまな

意味で「社会主義」イデオロギーが影響を与えていた。それは民主化の動向にも大きな影響を与えたばかりではなく、資本の動向である新自由主義、多国籍企業化と戦う思想と運動にも影響を与えていた。ところが80年代末から90年代初めに、一挙に「社会主義」体制の崩壊を迎えた。第二次世界大戦後に力を蓄えた諸国家と民衆はここではじめて「社会主義」イデオロギーの全面的見直しをせまられ、新たな思想と運動の構築に向かうことになる。その思想と運動は、国境を越えた資本の動向に対抗する国境を越えた民衆の連帯と国民国家の資本の支配からの解放という二つの課題に取り組むことを不可欠としはじめている。これは人類社会の巨大な一歩前進と捉えるべきである。

ところが、渡辺によると、植民地から独立した新興独立諸国の工業化の意欲や新国際経済秩序の要求はすべてアメリカの多国籍企業の画策だという。そして多国籍企業をアメリカの門戸開放政策の直接の「後継者」であるともいう<sup>3)</sup>。

このような評価は、第二次世界大戦後の諸国家独立の意義を軽視している。と同時に、第二次世界大戦後の国家と多国籍企業との関係の捉え方にも問題を残す。多国籍企業の時代になって、諸国家権力は、国民国家の利益を擁護する権力ではなくなりはじめた。それぞれの国家で活動する有力な多国籍企業や自国と関係の深い多国籍企業の利益、およびそれらと協力する自国の有力な諸アクターたちの利益擁護のために権力を行使する。しかも、アメリカに本拠を置く多国籍企業の利益を擁護してアメリカ政府が行動しても、それは世界的に展開する他の多国籍企業の利益や、その他、世界的に蓄財活動をする諸アクターの利益の擁護にもならざるをえない。アメリカのみに関わる企業の利益を擁護して保護的政策を取ろうとすると、他の資本主義諸国からアメリカ政府でさえも攻撃にさらされる。

渡辺は、多国籍企業は本国の国家権力の行使を不可欠とするという<sup>4)</sup>。たしかにその傾向は強いが、本国の国家権力だけではなく、どこの国の国家権

力でもよいのだ。ただし、どこかの国の国家権力を利用したいときには、いつでも利用できるような環境が整備されていなければならない。そのために、アメリカの国家権力をはじめとして、先進資本主義諸国の権力やその他の諸国の権力が資本と多国籍企業の利益を優先する権力として、階層的に編成されていることを必要とする。ただし、その編成は植民地主義や帝国主義とは異なり、覇権主義で編成されていると考えるべきだろう。

渡辺は、この階層的編成を帝国主義の視点から捉えようとするために帝国主義国と帝国に編成される諸国との関係があいまいになる。

渡辺は、帝国主義陣営の存在を主張する。そこに入るのは、アメリカであり、イギリスであり、フランスであり、ドイツ、日本も含まれる。その下にカナダなど発達した資本主義諸国が組み入れられる。しかし、アメリカ以外のこれらの発達した資本主義諸国が帝国主義国なのかどうかははっきりしない。さらにその下にアメリカにがんじがらめにされた途上国が位置する。これらの諸国は、アメリカによってがんじがらめにされているだけなのだろうか<sup>5)</sup>。

現代の世界は、このような帝国主義諸国の同盟を中軸にした階層化としては捉えられない。IMF・GATT体制が現代世界の秩序形成の主要な柱の一つであるとはいえるが、この体制は帝国主義の支配とは異なり、独立した途上国も参加する体制である。このような形式を取らなければ、現代の多国籍企業活動は展開できなかった。この体制はアメリカ帝国主義の多国籍企業の利益を守るだけではない。多国籍企業、あるいは資本一般の利益を守る体制である。第二次世界大戦以前の帝国主義のように自国の独占企業を守る帝国主義体制と第二次世界大戦以後の多国籍企業一般を守る体制とのちがいに注目すべきであろう。現代世界では多国籍企業や蓄財活動をする諸アクターを守る諸国家の階層的編成ができています。それを支える世界的諸機関もある。これは帝国主義諸国間の同盟による編成ではない。多国籍企業の自由な世界的市場活動とその要求があったからこそ、諸国家の共同支配としての階層的

編成が形成された。それは諸国家による多国籍企業の利益擁護の同盟であつて、帝国主義諸国の同盟ではない。その編成原理が帝国主義ではなく、覇権主義なのである。

渡辺は、帝国主義的階層編成の世界で「開発帝国主義」が支配し、帝国主義諸国が途上国の工業化を勧める政策を採るという。この主張にも問題がある。現代世界の覇権主義集団は、途上国の工業化などはめざしていない。「途上国」を多国籍企業や蓄財の諸活動の場として編成する政策を進めているだけである。多国籍企業にとって必要がなければ、工業化も開発もされないうまに放置される。

## 2. ネグリとハートの「帝国」論

次に、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートの帝国論を取りあげ、拙稿に不足していた論点を検討しつつ、批判を展開する。まず、ネグリとハートの「帝国」概念を簡潔にまとめてみよう。

### 2-1. 帝国の土台

ネグリとハートは、資本主義の発展の新たな段階を帝国の土台と考えている。それは世界市場の完成と関わる。

産業革命により、第一次産業を中心とする社会関係が第二次産業を中心とする社会関係に変化し、資本主義が発展した。この資本主義は、発展するために外部を不可欠とした。外部を内部化することによって、発展できた。それは帝国主義として現れた。

第二次世界大戦中に、新たに第三次産業の時代への変化が生じた。それをかれらは工業経済から情報経済への移行と主張する。それは世界市場の完成

と関わる。それについてネグリとハートは次のようにいう。

資本主義的市場が、内部と外部とを分割しようとするあらゆる企てにつねに逆らいつづけてきた一つの機械であるということ……資本主義的市場は障壁と排除によってその運動を妨げられ、またその逆に、自己の領域の内部に、より一層多くを包含しつつけることによって栄える。利潤は、接触・契約・交換・交流をとおしてのみ発生可能である。そして資本主義的市場のこうした傾向の到達点は、世界市場の実現によって画されることだろう。その理念的な形態において世界市場に外部は存在しない。地球全体がその領域なのである。私たちは世界市場の形態を、「帝国」の主権の形態について完全な形で理解するためのモデルとして使用してもさしつかえないだろう<sup>6)</sup>。

そして次のようにいう。

世界市場を舞台に展開される情報経済における社会的諸関係は、生産諸関係を完全に取り囲んでおり、社会的生産と経済的生産との間のいかなる外在性をも不可能にする。搾取と支配の対象は、特定の生産的活動ではなく、普遍的な生産する能力 *universal capacity to product*、つまり抽象的な社会的活動とその包括的な力になる傾向がある。普遍的な生産能力は、生ける労働 *living labor* が特定の場所に帰属することなく、創造的な仕方です社会的に分散するような活動として現れる<sup>7)</sup>。

世界市場では、生産諸力が完全に非-局所化 *de-localized* され、完全に普遍的なものになる。それらの力は単に商品を生産するばかりではなく、豊かで強力な社会的諸関係をも生産する。しかし、この新しい生産力はいかなる場所も持たない。というのは、それらはあらゆる場所を占めているからであり、またそれらはこうした不確定な非-場 *non-place* の中で生起する。

帝国とは、世界的な生産の非-場のことであり、いまや労働はそこで搾取されている<sup>8)</sup>。今日では、あらゆる経済活動が情報経済 *infomational economy* の支配下に入り、それによって変容させられる傾向にある<sup>9)</sup>。そこでの生産は、非物質的の生産である。人間の接触や相互作用がもたらす情動 *affective*

labor に関わる労働も非物質的生産である。情動をつくりだしたり、操作したりする。安心や幸福感、満足、興奮、情熱といった感情の生産でもある<sup>10)</sup>。これらの労働は社会的ネットワーク、コミュニティの諸形態を生みだす。生産が人間同士の相互作用という複雑なレベルに達するほど豊かになってきている<sup>11)</sup>。この非-場には、協働が労働それ自体に含まれている。非物質的労働は、無媒介的に社会的相互作用と協働とを含んでいる。今日では、生産性、富、それに社会的な剰余の創出は、言語的、コミュニケーション的、そして情動的なネットワークをとおして協働的な相互作用の形を取っている<sup>12)</sup>。

さらに工業経済から情報経済への移行により、生産の劇的な脱中心化が起こる<sup>13)</sup>。労働の協業のネットワークは領土的または物理的中心を必要としない。情報のネットワークは、社会的生産の同時性のようなものへと向かう。生産のより大規模な社会化をもたらす。これをネットワーク生産という<sup>14)</sup>。

## 2-2. マルチチュード

このような世界的生産の非-場に、新しい抵抗の非-場が形成される。それを労働するマルチチュード *multitude* という。ネグリとハートは、現代の管理社会は「生 *life* をくまなく包囲」し、「生を行政的に管理する」「生権力」*biopower* に支配されているという。「生権力」とは「社会的生 *social life* に密着しつつ、それを解釈し、吸収し、再分節化 *rearticulate* することによって、内側からそれを規制する権力形態」である<sup>15)</sup>。このような権力支配により、社会的諸力が相互包含しあう関係性がより一層強化される。このような「生政治的な文脈」が、生と死、富と貧困、生産と社会的再生産、等々の二者択一を権力に提供する<sup>16)</sup>。この権力と並んで、あるいはこの権力の存在基盤として「マルチチュード」が存在する。生権力とマルチチュード

ドについてのネグリとハートの説明は、抽象的で難解である。

マルチチュードは、「搾取され従属を強いられた生産者たちから」形成される<sup>17)</sup>。それがプロレタリアートである。ネグリとハートは「プロレタリアート」という概念をただ単に産業労働者階級を指示するものとしてではなく、資本のルールに従属せしめられ、それによって搾取され、またそのもとで生産するすべての人々を指示するものとして理解している。したがって、資本がその生産諸関係をさらに一層一般化していくにつれて、あらゆる労働形態がプロレタリア化されていくことになる。それぞれの社会において、また世界全体において、プロレタリアートは社会的労働の一般的形象 general figure にますますなりつつある<sup>18)</sup>。プロレタリアートが労働の普遍的形象 universal figure になるにつれて、プロレタリアートの労働の対象も同じく普遍的なものになりつつある。社会的労働は生 life そのものを生産している<sup>19)</sup>。「プロレタリアート」は、資本によって労働を搾取されるあらゆる人々、つまり協働する cooperating マルチチュード全体を指示する一般概念である<sup>20)</sup>。

このプロレタリアートの力と戦いは強力であった。ネグリとハートは脱植民地化の力もその一環として捉えている。また、60年代に展開されたベトナム戦争、先進諸国の労働運動、学生運動、フェミニズム運動もその一環であった。

1960年代の終わりごろまでに、さまざまな解放闘争は、力と機動性と形態の柔軟性 plasticity of form を身につけるようになっていた。そして、その結果、資本主義的近代化プロジェクト（その見かけが自由主義的なものであろうと社会主義的なものであろうと）は、外海へと追いやられ、方角を見失うことになった。それらの解放闘争は、アメリカとソビエトという、うわべの二極的分割の背後に、単一の規律的モデルをはっきりと見て取ることができたのであり、そしてこのモデルに反対すべく莫大な数の運動がこれと戦ったのである<sup>21)</sup>。ネグリとハートのこの評価は大事である。このような新しい力を軽視し、見落としているところに新植民地主義論や渡辺の帝国主義論の弱点が



ある。

この闘争で、すでに近代的主権に関する理論と実践が不十分なものであることを世界中のマルチチュードは認識したとネグリとハートはいう。だから、帝国主義と反帝国主義に関する古典的な諸理論も、説明力のいっさいを失った。大衆化されたさまざまな主体性や、さまざまな住民、そしてまたさまざまな被抑圧階級は、それらが近代化のプロセスの中に入りはじめたまさにその瞬間にそのプロセスを変革し、それを超えて進みはじめた。解放を求めるさまざまな闘争は、世界市場の中に据えられ、そこに従属させられたまさにその瞬間に、近代的主権を支える要石が悲惨なほど不十分なものであることを察知した。新しい並外れた主体的力は、植民地主義を抜け出し、近代性に直面したとき、自分たちが取りかかるべき主要な仕事は近代性の中に入るのではなく、その外へ出ることだと気づいたのである<sup>22)</sup>。この評価も適切である。ここにこそ、70年代の輸入代替工業化の失敗の根源をみるべきであろう。

### 2-3. 帝国とは

このようなマルチチュードの動向があつて、それに対抗する力として帝国が形成されたと二人は主張する。

マルチチュードとは、帝国の秩序と権力が抗するデモクラシーの運動、「対抗-帝国」を根底的に捉えるために提起した概念であり、「自由で生産的な諸実践の普遍性」と捉えることができる<sup>23)</sup>。

ネグリとハートは、グローバル化の過程で新しい政治秩序、新しい主権形態が構成されつつあると主張する。帝国主義の時代は終わった<sup>24)</sup>。帝国的主権は脱中心化されたネットワーク状の支配装置なのであり、物理的領土を必須の要素とした国民国家の主権とはちがひ、そのような意味での領土を持たない「非-場」である。

資本の配置は、労働力の非物質的、協調的、コミュニケーション的、そして情動的な新しい組み立てに適合し、それを支配することができるものに限られた<sup>25)</sup>。

市場と生産回路のグローバル化にともない、グローバルな秩序、支配の新たな論理と構造、一言でいえば、新たな主権の形態が出現した。帝国とはこれらグローバルな交換を有効に調整する政治的主体のことであり、この世界を統治している主権的権力のことである<sup>26)</sup>。国民国家はもはや最高かつ至上の主権的権威とは考えられない<sup>27)</sup>。

しかし、主権そのものが衰退したのではない。主権が新たな形態を取るようになった。この新たな形態は、単一の支配論理のもとに統合された一連のナショナルでかつ超国家的 supranational な組織体からなる、グローバルな主権形態＝帝国の出現と捉えるべきだ<sup>28)</sup>。

新しい帝国は、帝国主義とは対照的に、権力の領土上の中心を打ち立てることもなければ、固定した境界や障壁に依拠しない。帝国は、脱中心的 decentered で脱領土的 deterritorializing な支配装置なのであり、これは、その絶えず拡大し続ける開かれた境界の内部に、グローバルな領域全体を全身的に組み込んでいく。帝国は、そのコマンドのネットワークを調節しながら、異種混合的なアイデンティティ hybrid identitied と柔軟な階層秩序、そして複数の交換を管理運営する。

ネグリとハートは、帝国概念を次のように捉える。

第一の特徴は境界を欠くこと。帝国の支配には限界がない。空間的な全体を包み込む体制。文明化された世界全体を実際に支配する体制。

第二に、征服に起源を持つ歴史上の一体制として自らを呈示するのではなく、歴史を實際上宙づりにして、いまあるさまざまな状況を恒久的に固定化する秩序として自らを呈示する。

第三に、帝国の支配はあらゆる社会生活の深部にまでその力を行き渡らせながら、社会秩序の全域に作用を及ぼす。帝国は領土と住民を管理運営する

ばかりではなく、人間的自然を直接的に支配することを求める。帝国の支配は社会的な生をまるごと対象としているのであり、したがって、帝国はバイオパワーの範例的な形態 the paradigmatic form of biopower を呈示している。

最後に、帝国の実践はいつも血にまみれているのに、帝国の概念のほうは、常に平和、歴史の外部にある恒久的かつ普遍的な平和に捧げられている<sup>29)</sup>。

帝国主義から帝国への変化の過程は、ベトナム戦争後、顕著に現れた。その過程は次のような内容を持っていた。

1. アメリカを起点にのびているさまざまな階層的な線に従って、世界市場を徐々に再構成していった脱植民地化の過程。
2. 生産の漸次的脱中心化。
3. 地球全体に規律的な生産体制と規律社会を押し広め、それらを一對のものとして順次進展させていくことになった国際関係の枠組みの構築<sup>30)</sup>。

脱植民地化の過程は、支配の諸関係が世界的規模で階層化される過程であった。多国籍企業は、脱植民地化した国々と従属地域の経済的・政治的変革を推し進める原動力であった。アメリカは、直接的指令を下さないにもかかわらず、多国籍企業の活動を保障し、統括した。これこそが「帝国」を構成する決定的段階である<sup>31)</sup>。

以上の過程は、グローバルな秩序の形成過程であった。フォード主義的賃金体系、テーラー主義的労働の組織化、近代化、パターンリズム＝家父長的温情主義・保護主義を押し進める福祉国家、この三つによる規律化であった。ここでいう規律性とは、世界的互換性という意味でもある<sup>32)</sup>。

ニューディール政策は、脱植民地化、脱中心化、規律性を推進した。トルーマンは、旧来の帝国主義が自分たちの計画に入り込む余地はなくなることを理解していた<sup>33)</sup>。

帝国は、三つの層からなる支配のピラミッドを形成している。

第一の頂点の狭い層→軍事力・強制力でヘゲモニーを握るアメリカ。その下に国民国家のいくつかの主要なグループがいる。G7、パリ・クラブ主要債権国会議、ロンドン・クラブ民間銀行債権者会議、ダヴォス会議世界経済フォーラムなどが国際金融機関を管理運営して、国際取引を規制する力を持つ。さらにその下にもろもろの連合組織の雑多な集まりが、軍事レベルと通貨レベルでヘゲモニーを行使している。

第二の層→ここでは指令は、統合よりも節合に力点を置く。幅広く世界中に配分されている。多国籍企業が世界市場をとおして拡大してきたネットワークによって構造化されている。多国籍企業は巨大なコミュニケーション・ネットワークを構築している。もう一つのレベルには多国籍企業に従属する国民国家の集まりがある。それらはいまや本質的にローカルで領土化された諸組織となっている。

ここでの国民国家は、グローバルな覇権的諸権力にたいする政治的媒介の機能、多国籍企業との交渉の機能、領土内での生政治的欲求に従って歳入を再配分する機能を持つ。

国民国家はグローバルな流通の流れのフィルター、グローバルな指令が節合される際の調整器でもあり、住民を可能な限りで規律化する<sup>34)</sup>。

第三の層→民衆の利害を代表する諸集団がいる。多くの場合、国民国家がこの役割を担う。その他に国民国家や資本から相対的に独立している多様な組織がある。メディアや宗教組織もその一員である。そして重要なのはNGOである。民衆組織といいかえるほうがよい。その中でも、グローバルで普遍的な人間の利害を代表しようとする民衆組織に注目する必要がある。人権団体、平和団体、飢餓救済団体等である。普遍的道徳の要求に足場を置く組織である。民衆の根底にある生命力を代表する組織でもある<sup>35)</sup>。

帝国とは、君主政的な権力の統一と、それによる力のグローバルな独占があり、多国籍企業や国民国家を通じた貴族政的な節合があり、そして多種多

様な NGO、メディア組織、その他の「民衆」組織とともに、またもや国民国家の形態で呈示される民主政的－代表制的な民会がある。到来しつつある帝国の政体は、こうした三つのよき統治の伝統的範疇をポリュビオスのモデルと形式的に対応するような関係において結びつけているといえるかもしれない<sup>36</sup>。

しかし、ローマ帝国とはちがう。

世界市場という単一体への支配をとまなっているため、物、テクノロジー、労働力の循環を保障するように求められている。支配の中心を持たない。ローマを持たない。支配は、あるいは主権は、多様な形態を取り、空間的に分散している。

商品生産がネットワーク構造に埋め込まれた非物質的サービスに際立って規定される傾向にあるとき、商品を生産し販売するために、広大な生産者と消費者の地平を諸市場内部に関係づけることが求められる<sup>37</sup>。

さらに、財の流通にたいする統合された世界的統治としてのみならず、その再生産の諸条件を規定する集会的な社会的労働の組織化のメカニズムとして機能するあり方が、かつてないほど比重を増している社会的行為者自身の協働という手段とその力学をとおして、国境を越えた生産と流通の節合の平面上に位階的指令やその秩序維持の機能を展開しなければならないことを強いている<sup>38</sup>。

なぜ、頂点にアメリカがいるのか。

このような中心的権威の地位にアメリカがついているのは、アメリカ自身の憲法の持つ帝國的傾向による。それが帝國的なのは、アメリカの立憲のプロジェクトが、開かれた空間を再節合し、限界のない領野を横断するネットワークの中で多様にして特異な諸関係を絶えまなく再発明していくようなプロセスをモデルにして構築されているからなのである<sup>39</sup>。アメリカの権力は、独立時から、ネットワーク的権力 network power である<sup>40</sup>。単独的かつ民主的ネーションであり、自由の帝国であった<sup>41</sup>。

湾岸戦争によって、アメリカは、それ自身の国家的動機に応じてではなく、グローバルな法権利 global right の名において、国際的正義を管理運営することのできる唯一の権力として登場した。アメリカは、帝国主義の利害関心ではなく、帝国の利害関心にもとづいて行動することが明確になった<sup>42)</sup>。

ウイルソンから国際連合までの歴史とその後の動きは、帝国の法権利を生産することのできる国際機構を形成し、整理統合してきた。国際法の概念構成を超えて、中心的な権威、つまり法的活動を駆動させる正当のかつ、超国家的な原動機が生まれてきた。交渉と協定という限定された土台の上で生まれた巨大な国際的諸制度が、まるで中心的な権威が存在するかのように振舞いはじめた<sup>43)</sup>。

## 2-4. いくつかの問題点

2-4-1 拙稿「帝国主義・帝国・覇権主義」において、私は資本主義の最高の段階は帝国主義であるというレーニンの規定が革命のための政治的規定としては有効であったとしても、歴史的には間違いだったと書いた。レーニンの規定が「政治的」だという評価はネグリとハートもしている。しかし、「歴史的」評価においてかれらと若干のちがいがあ

る。レーニンは資本主義の最高の段階を帝国主義と規定し、この新しい段階は、資本主義の矛盾を激化させており、死滅しつつある資本主義だと捉え、そこにこそ社会主義革命の基盤があると考えていたと拙稿では主張した。

しかし、ネグリとハートは、これとは異なり、次のようにいう。

「レーニンは、近代的主権の問題設定と資本主義的發展のそれとを、統一された批判のレンズのもとに集め、両者を統合したのだ。そのようにしてかれは、批判のさまざまに異なる線を編み合わせることによって、近代性の彼方を垣間見ることができたのである。別の言い方をすると、帝国主義の概念を政治的に練り上げ直す作業を通じて、レーニンは他のどのマルク

ス主義者にも増して帝国主義を超える新たな段階への移行を予期することができたのであり、そしてまた、現出しつつある〈帝国〉的主権の場所（というよりも、じっさいには非-場）を同定することができた<sup>44)</sup>。

つまり、レーニンは、帝国主義的实践がさまざまな「境界」をつくりだし、ある時点で、「資本主義的發展とその世界市場の完全な実現を妨げるものに転じる」ことを予知し、「資本にとって必要なのは、ゆくゆくは帝国主義を超克し、内部と外部の間の障壁を破壊すること」<sup>45)</sup>だと捉えていたと、かれらはいふ。

そこから、帝国への發展を阻止することが課題としてでてくる。「反発は革命的」でなければならないというのがレーニンの思想であり、「世界共産主義革命」か、それとも、〈帝国〉かと捉えていたという主張になっている<sup>46)</sup>。

だから、かれらによれば、レーニンは、超帝国主義へと向かう傾向が実現される事態と闘うことを提起した<sup>47)</sup>。その観点から、ヒルファディングやカウツキーへの批判が展開されたという。

レーニンは、資本が独占によって定義される新しい段階に入り、またその結果、矛盾の増大と均等化の危機とをもたらすとしたヒルファディングの主張を取り入れた。しかし、レーニンは、統一化された国際銀行をユートピアと批判し、なおも資本主義的やりかたで危機を包摂することが可能になると信じたヒルファディングを批判した。

また、カウツキーは、資本主義的世界市場の政治的かつ経済的な統一を実現できると主張した。帝国主義の暴力的抗争の後に、「超帝国主義の」段階が続くという。レーニンは、資本主義的發展にはさまざまな諸国の金融資本間の国際協力によるただ一つの世界トラストへ向かう傾向があるというカウツキーの基本テーゼには同意していた。しかし、レーニンは、将来に到来するはずのなんらかの平穏な超帝国主義を待望するよりも、資本の現行の帝国主義的組織が提出する矛盾にたいして行動を起こすべきだと主張した<sup>48)</sup>。

ネグリとハートは、レーニンの主張をこのように捉え、「レーニンのこの

否定は、理論的なものではなく、むしろ政治的なものであった」と結論づける<sup>49)</sup>。

『帝国主義論』で、レーニンは、「新しい資本主義はなにものかへの過渡である」とはいつている<sup>50)</sup>。また、金融資本が支配し、金融上の「力」を持つ少数の国家が他のすべての国家からぬきでることになり、資本の輸出こそ、世界の民族と国との大多数にたいする帝国主義的抑圧および搾取の、またひとにぎりの富裕な国家の資本主義的寄生性の、堅固な基礎であるともいう<sup>51)</sup>。そして、世界は「比喩的な意味での分割」と「直接の分割」にさらされる<sup>52)</sup>。金融資本は、あらゆる経済関係とあらゆる国際関係において、きわめて大きな、決定的勢力であるから、完全な政治的独立を享有している国家をさえ従属させる能力がある。政治的独立を維持しながら金融的に、外交的に従属させるのは、金融資本のもろもろの活動の一つである<sup>53)</sup>。

直接の分割とは区別された金融的従属と「比喩的な意味」の分割について、最後の段階の帝国主義との関係で論じられているだけであり、直接的分割の後に、比喩的分割の時代が来るとも、それを「帝国」として論じているわけでもない。レーニンは、やはり、帝国主義を歴史的に死滅しつつある資本主義として捉えていた。

**2-4-2** ネグリとハートは、世界市場を新しい生産様式と結びつけて、帝国論を構築している。しかし、この生産についての主張がもっとも理解困難である。新しい生産では、社会的諸関係と生産諸関係が融合しており、そこでは普遍的生産が行われており、生産諸力が完全に普遍的なものになり、非物質的生産が行われて、生ける労働が支配している。

世界市場の実現が資本主義的生産様式の内部における移行を示している。……この世界は、差異化と均質化、脱領土化と再領土化が複合的に絡まりあった、新たな体制によって規定されている。

この体制は、これまで支配的だった生産過程そのものを変容させつつ、構



築された。その結果、産業的工場労働の役割が減少し、それに代わって、コミュニケーションと協働と情動労働が重視されるようになった。バイオポリティカルな生産へと向かっている<sup>54)</sup>。生産諸力が完全に非-局所化され、完全に普遍的なものになるにつれて、それらの力は単に商品を生産するばかりではなく、豊かで強力な社会的諸関係をも生産する。

プロレタリアートが労働の普遍的形象になるにつれて、プロレタリアートの労働の対象も同じく普遍的なものになりつつある。社会的労働は生そのものを生産している<sup>55)</sup>。

情報のネットワークは、社会的生産の同時性のようなものへと向かう。生産のより大規模な社会化をもたらす。このように主張される。

拙稿「帝国主義・帝国・覇権主義」では、覇権主義を生みだす基盤について論じていない。ネグリとハートのこの主張は、難解ではあるが、世界市場に生じている新しい生産様式を考察しようとしており、参考になる。多国籍企業のつくりだしている新しい生産形態を国民国家という枠組みから出発する帝国主義論では理論的に適切に捉えられないのではないか。ネグリとハートは帝国主義論の理論的枠組みを根本的に打ち破ろうとしている。かれらが問題にするように、社会主義世界の崩壊によって開かれた世界市場を舞台にして、明確に姿を現している新しい人類的生産様式を捉えなければならない時代になっていることはたしかである。

国民国家という枠でくくられているとはいえ、その枠を越えて全人類的相互依存関係が形成されており、その相互依存は、資本関係であるということは拙稿で指摘した。この関係は、ネグリとハートも主張するように、経済関係であるとともに、政治的関係でもある。

資本関係は、資本の物象化の世界である。そこではすべての関係が物象関係として現れる。労働は、管理労働を含めてすべて労働力商品の担い手である賃金労働者の労働として現れる。資本も貨幣、商品、株式、証券等々の商品の担い手を媒介にして、循環する。これらの関係は、完全に法的関係とし

て現れる。そして担い手（人間）たちは、ブルジョア的市民として、社会的諸関係を結ぶ。このような意味で、この関係は、経済的であると同時に政治的である。

この関係は、裏返してみると、人間関係である。人間が自分の所有する物に支配されて、形成されている関係であり、利潤追求がその関係を再生産する動機となっている。つまり人間たちは、資本関係を発展させればさせるほど、その関係の個々の環を形成する人間個人の人間性の喪失を極限まで推し進めながら、人類全体としては、かつてなく、類的存在へ接近するという矛盾の関係である。

ネグリとハートは、「民衆」とは「既存の特権と財産を防衛する、組織された個別性」<sup>56)</sup>であると捉えるとともに、マルチチュードについては「自由で生産的な諸実践の普遍性」と捉えている。しかし、資本関係の世界は、どこまでもかれらのいう「民衆」の世界であり、「民衆」の否定の上に、「自由で生産的な諸実践の普遍性」が生みだされるのだ。資本関係はあくまでも疎外された人間関係であり、その否定の上に、類的存在としての普遍的人間性が生みだされる。ネグリとハートの新しい生産論には、マルクスの主張した疎外論が欠けているのではないだろうか。

しかし、ネグリとハートは、情動に関わる労働 affective labor が社会的ネットワーク、コミュニティの諸形態を生みだしており、生産が人間同士の相互作用という複雑なレベルに達するほど豊かになってきており、協働が労働それ自体に含まれるようになってきているといい、そして非物質的労働は、無媒介的に社会的相互作用と協働とを含んでおり<sup>57)</sup>、生産性、富、それに社会的な剰余の創出は、言語的、コミュニケーション的、そして情動的なネットワークをとおして協働的な相互作用の形をとっているという。以上の指摘は重要である。これらの労働は資本関係の中で生みだされてきたとはいえ、かれらのように普遍的現象になっている。これらの場を利用して、人間性の回復を意識的に追求する世界各地の人々の新しい社会形成の闘いが可能

になりはじめている。

2-4-3 次に、拙稿で、新植民地主義論には戦後の植民地独立運動や民主主義運動を展開した民衆の力の軽視があったと指摘した。その点で、ネグリとハートのプロレタリアートの力の評価は参考になる。プロレタリアートの存在様式が、生産力の発展とその世界市場での展開によって根本的に変化し、巨大な力で資本関係と対立しはじめたために、帝国が成立したとネグリとハートは主張している。現代世界のさまざまな動向を理解するために、この視点はとりわけ重要である。ハートは別の論文で次のようにいつている。

グローバリゼーション抗議運動は、今日の資本主義的なグローバリゼーションを支配する力、すなわち支配的な国民国家と、国際通貨基金、世界貿易機構、大手の企業などの複雑さと複数主義的な性格を認識しているだけではない。平等と自由にもとづいて、国境と地域的な境界を越えた複数の相互的な活動によって、資本主義的なグローバリゼーションに代わる民主主義的なグローバリゼーションを創造しているのである。

要するに、グローバリゼーション抗議運動が達成した偉大な業績の一つは、政治を国家や国家ブロック間の争いとして考えるのをやめたことにある。生まれうる将来について、グローバルなビジョンをそなえたグローバルなネットワークの結びつきの政治学として、インターナショナリズムが再発明されたのである。この側面では、反ヨーロッパも反米主義も、もはや意味のないことにすぎない<sup>58)</sup>。この主張には同意できる。

しかし、ここでもかれらの主張は次の点で問題がある。

かれらは、資本がその生産諸関係を一般化していくにつれて、あらゆる労働形態がプロレタリア化されていくと捉えている。ここで主張されている「プロレタリア」とは、マルクス主義で規定されてきた「生産手段から切り離された裸の個人」と同じ概念であると理解できる。これまでのマルクス主義は、資本関係に取り込まれた賃金労働者と理論的抽象として導き出された

「生産手段から切り離された裸の個人」とを同一視し、両者をプロレタリアと規定し、賃金労働者の集合を労働者階級と捉えた。しかし、資本関係を構成する賃金労働者は、まさに、ネグリとハートが「民衆」と規定する「個別性」としての個人にすぎない。商品の物象化以外のなにものでもない。拙稿ではブルジョアの市民と規定した。

これらの集合はまさに「民衆」でしかありえない。「民衆」が、「社会的労働の一般的形象」や「労働の普遍的形象」になり、その労働の対象が「普遍的なもの」になることはありえない。「民衆」が労働力商品としての自己の存在を否定し、人間的労働の担い手に復帰することによって、はじめてそれは可能になる。資本関係に労働力商品として組み込まれている限り、労働対象は商品でしかなく、プロレタリアートは商品を生産している。マルクスが資本関係を生みだす根源とした「生産手段から切り離された」労働者を、資本関係が発展すればするほど、私たちは理論的抽象として把握できるだけである。その集合としての「労働者階級」も理論的抽象的概念である。

「民衆」は、資本関係の中で、商品所有者として、商品取引の当事者として、平等を自覚し、対等平等の関係の重要性を認識する。しかも、それを商品として自覚するのではなく、人間として自覚するため、それは人権論として展開されるようになる。それが、資本関係を人間関係に転換する基礎になる。これについては拙稿ですでに論じた<sup>59)</sup>。この転倒された人間の意識、疎外論がネグリとハートにはないため、プロレタリアと民衆とマルチチュードの概念が明確化されていない。

2-4-4 ネグリとハートの主張で、いま一つわかりにくいのは、アメリカの憲法が持つ帝國的傾向である。それが帝國的なのは、アメリカの立憲のプロジェクトが、開かれた空間を再節合し、限界のない領野を横断するネットワークの中で多様にして特異な諸関係を絶えまなく再発明していくようなプロセスをモデルにして構築されているからなのだという<sup>60)</sup>。アメリカの権

力は、独立時から、ネットワーク的権力であり、単独的かつ民主的ネーションであり、自由の帝国であったという<sup>61)</sup>。

しかし、アメリカの憲法やアメリカの「理念的基礎」としての「普遍主義」に帝国の基礎を求めるのには疑問が残る。アメリカの帝国主義的野望と、その後の覇権主義的野望の動機は、前掲拙稿で述べたように、資本の市場、資源、労働力の支配にあるとみたほうが、説得力がある。

拙稿では覇権主義確立の手段について論じたが、ネグリとハートが論じた帝国のピラミッド・モデルは、現代世界の覇権がどのようなアクターたちによって、どのように行使されているか、具体的に、構造的に示していて、参考になる。

これとは異なる観点から、村上泰亮が指摘するヘゲモン概念は傾聴にあたいする。かれは、経済力、軍事力、文化的影響力、政治力で頭抜けた国力を持つ国が、世界システムを円滑に機能させるために「国際的公共財」を提供せざるをえず、形成されたヘジェモニック・システムの時代の存在を指摘する。パックス・ブリタニカとパックス・アメリカナの時代である。この主張は、産業革命以後の覇権主義が世界システムの編成に重要な役割をはたしたと指摘している。これは前掲拙稿の主張とも、そこで指摘した金子勝の主張とも重なる。しかし、村上はヘゲモンの時代は終わったと捉える。あくまでも超大国がヘゲモンとして世界システムを機能させている時代に村上のヘゲモン概念は限定されている。拙稿では、資本のヘゲモニーが機能していると捉えている。資本のヘゲモニーはさまざまなアクターを媒介にして貫徹される。村上は覇権主義の時代は終わったと捉えるが、拙稿では覇権主義の現れ方の変化と捉える<sup>62)</sup>。

最後に、ネグリとハートによる世界市場を土台にして構成されている非-場としての帝国という主張には同意しかねる。帝国的主権は脱中心化されたネットワーク状の支配装置なのであり、物理的領土を必須の要素とした国民国家の主権とはちがひ、そのような意味での領土を持たない「非-場」であ

る。そのような非-場が形成されてきているとはいえようが、それを帝国と規定できるほどに実体化しているとは、現段階ではいえない。ポリュビオスのモデルとの類似性はあるとしても、支配の中心を持たない実態を帝国と規定するには無理があるのではないか。国民国家の枠を越えて活動する資本の代理人たちが、さまざまな組織や手段を行使して、世界資本市場の障害を取り除くために覇権を行使しており、それに多くの国民国家の権力者たちも協力している。そしてその協力体制そのものも覇権主義により、階層化されている。これは帝国とは異なる現象ではないか。

### 3. ウッドの「資本の帝国」論

最後に、ネグリとハートの帝国論を批判したエレン・メイクシンズ・ウッドの『資本の帝国』を取りあげてみよう<sup>63)</sup>。

ウッドは、国民国家の重要性が低下しているとするネグリとハートの主張にたいし、グローバリゼーションの時代にあつて、国民国家の役割がますます重要になっていると主張する。しかし、ネグリとハートが帝国を形成する階層秩序に占める国民国家の役割を軽視しているとは思えない。帝国における「民会」として国民国家の役割を捉えている。表現の上で、ウッドは国民国家を重視しているように感じるが、「資本の帝国」は国民国家なしには存在しえないという場合の国民国家の位置づけは、ネグリとハートとたいして変わりがないように読み取れる。それはネグリとハートの帝国概念とウッドの帝国概念とにほとんどちがいがいないためであろう。両者とも外部世界のなくなった資本の支配体制を「帝国」といつている。

ウッドは、マルクス主義の帝国主義論について、ネグリとハートと同様、外部を内部化する時代の資本の動向として捉えている。

「たとえばレーニン『帝国主義論』(1917年)で、帝国主義を『資本主義

の最高の段階』と呼んだが、その背景にあるのは、資本主義が帝国主義の段階に到達した時期には、帝国主義の諸国は軍事的に対決するようになるという認識である。帝国主義の諸国は、まだ資本主義的になっていない世界を分割し、再分割するために激しい対立を展開すると考えたのである。

とくに資本主義が不均等な形で拡大すると、主要な帝国主義権力の対立関係が激化する。同時に、資本主義的でない諸国から帝国主義への抵抗も強まる。帝国主義が資本主義の『最高段階』であるのは、帝国主義が資本主義の最終段階だからだ。マルクス主義者たちは、帝国主義の犠牲になった非資本主義的な世界が、最終的かつ完全に資本主義のうちに吸収される前に、資本主義は終焉すると信じていた。これが帝国主義をめぐるマルクス主義者たちの議論の核心なのである。]<sup>64)</sup>

「マルクス主義の帝国主義論ではその定義からして、資本主義は資本主義的でない環境を必要とすると想定されているのである。実際に資本主義が存続するためには、資本主義的でない社会が必要であるだけではない。軍事力と地政学的な強制など、基本的に資本主義とは異質な『経済外的な力』の装置と、伝統的な国民国家の競争、植民地戦争、領土の支配を必要とするのである。]<sup>65)</sup>

この主張は、ネグリとハートの主張とたいしてちがいはない。この古典的帝国主義が1918年には実質的に終焉を迎えていたとウッドはいう。そして世界ではじめてアメリカ合州国がほんとうの意味での経済的帝国になる兆候を示したという主張もネグリとハートと同じである。そしてネグリとハートと同様、ほんとうの意味での新しい「帝国」が登場したのは、第二次世界大戦後であったと主張する。

同様に、第二次世界大戦後に成立したとウッドのいう「資本の帝国」概念は、ネグリとハートとの帝国概念と同様にあいまいな概念である。

ウッドは、第二次世界大戦後、アメリカが新しい帝国主義を主導したという。と同時に次のようにもいう。

「この新しい帝国主義は、複数の国家システムと経済の至上命令によって運営されるものだった——この組み合わせによって生まれるあらゆる危険性と矛盾をひきうけながら。この経済的な帝国は、さまざまな国家に対する政治的および軍事的な覇権で維持されることになる。」<sup>66)</sup>

ここでは帝国主義と帝国と覇権主義の概念が無規定のままに使用されている。

ウッドは次のようにいう。

「領土を征服することも、敵国に勝利を収めることも目的としない軍事力を備えた帝国主義が初めて登場したのである。領土の拡張を求めず、交易路を物理的に支配することも求めない帝国主義である。この帝国が支配できる版図はかつてなく巨大であり、しかも他国を圧倒するような巨大な軍事力を備えているのである」。しかも「この新しい帝国主義には、明確で確定的な目的がないからこそ、これほど巨大な軍事力が必要なかもしれない」<sup>67)</sup>。

ここでは、私が区別すべきであると主張した「覇権主義」概念と帝国主義概念の区別のない使用が読み取れる。しかも、新しい帝国主義には明確な目的がないとまでいわれている。領土を求めず、交易路の支配を求めない政策をなぜ帝国主義と規定すべきなのか、覇権主義概念とどのように異なるのか、ウッドの主張はあいまいなままである。しかも新しい帝国主義には明確な目的がないという主張には同意できない。

ウッドは次のようにもいう。

「新しい帝国主義がグローバリゼーションと呼ばれるのは、ある一つの国民国家の領土的な境界と政治的な支配をはるかに越えた国際経済における覇権に依拠しているからにはほかならない。これはほかのどの帝国主義よりも、複数の国家で構成されるシステムに依拠した帝国主義なのである」<sup>68)</sup>。「アメリカの外交政策が目指しているのは、主権を持った国民国家で構成されるグローバルなシステムにおいて覇権を確立することであり、そのた



めに巨大な軍事力で他国を圧倒しようとしているのである」<sup>69)</sup>。

ウッドは古典的帝国主義のさまざまな形態を検討し、その共通点は、領土の拡大、植民地支配であったことを論証している。領土も交易路も支配せず、目的もはっきりしない資本の動向をなぜ「資本の帝国」というべきなのか、明確にされているとはいいがたい。むしろ覇権主義こそが適切な概念であるということができる。ウッドの「資本の帝国」概念は、植民地のない植民地主義を主張した「新植民地主義論」の域をでていない。

〔注〕

- 1) 渡辺治『講座現代日本1 現代日本の帝国主義化 形成と構造』（大月書店、1996年）38頁。
- 2) 同上、60頁。
- 3) 同上、68頁。
- 4) 同上、70頁。
- 5) 同上、77頁。
- 6) Michael Hardt, Antonio Negri “*Empire*”, Harvard University Press, 2001. アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート 水嶋一憲訳『帝国 グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』（以文社、2003年）246頁（p.190）。括弧内は原書頁。
- 7) 同上、275頁（p.209）。
- 8) 同上、275頁（p.210）。
- 9) 同上、371頁（p.287）。
- 10) 同上、377頁（p.293）。
- 11) 同上、378頁（p.293）。
- 12) 同上、378頁（p.294）。
- 13) 同上、379頁（p.294）。
- 14) 同上。
- 15) 同上、41頁（pp.23-24）。
- 16) 同上、45頁（p.26）。
- 17) 同上、489頁（p.394）。
- 18) 同上、333-4頁（p.256）。
- 19) 同上、336頁（p.258）。
- 20) 同上、499頁（p.402）。
- 21) 同上、326頁（p.250）。

- 22) 同上, 327 頁 (p.251)。
- 23) 同上, 404 頁 (p.316)。
- 24) 同上, 6 頁 (p.xiv)。
- 25) 同上, 358 頁 (p.276)。
- 26) 同上, 3 頁 (p.xi)。
- 27) 同上, 4 頁 (p.xi)。
- 28) 同上, 4 頁 (p.xii)。
- 29) 同上, 7-8 頁 (pp.xiv-xv)。
- 30) 同上, 319 頁 (p.245)。
- 31) 同上, 321 頁 (pp.246-247)。
- 32) 同上, 322 頁 (p.247)。
- 33) 同上, 324 頁 (pp.248-249)。
- 34) 同上, 396-7 頁 (pp.309-310)。
- 35) 同上, 400-1 頁 (pp.311-313)。
- 36) 同上, 402 頁 (pp.314-15)。
- 37) 同上, 405 頁 (p.317)。
- 38) 同上, 406 頁 (p.318)。
- 39) 同上, 235 頁 (p.182)。
- 40) 同上, 209 頁 (p.160)。
- 41) 同上, 229 頁 (p.178)。
- 42) 同上, 233 頁 (p.180)。
- 43) 同上, 234 頁 (p.181)。
- 44) 同上, 303 頁 (p.232)。
- 45) 同上, 305 頁 (p.234)。
- 46) 同上, 306 頁 (p.234)。
- 47) 同上, 302 頁 (p.231)。
- 48) 同上, 301 頁 (p.230)。
- 49) 同上。
- 50) レーニン, 福島種典訳『帝国主義論』(大月書店, 1952 年) 59 頁。
- 51) 同上, 76 頁。
- 52) 同上, 87 頁。
- 53) 同上, 106 頁。
- 54) ネグリ, ハート, 前掲書, 5 頁 (p.xiii)。
- 55) 同上, 336 頁 (p.258)。
- 56) 同上, 404 頁 (p.316)。

- 57) 同上, 378 頁 (pp.293-294)。
- 58) 『哲学クロニクル』第 354 号, マイケル・ハート「避けるべき(罫)」, ガーディアン, 2003 年 2 月 21 日号。http://www.melma.com/mag/58/m00026258/a00000353.html
- 59) 拙稿「市民の力の獲得と人間解放の政治学」(上)(下), 『岐阜経済大学論集』第 32 卷第 4 号, 1999 年 3 月, 第 33 卷第 1 号, 1999 年 6 月。
- 60) ネグリ, ハート, 前掲書, 235 頁 (p.182)。藤原帰一も同様の主張をしている。藤原帰一『デモクラシーの帝国——アメリカ・戦争・現代世界——』(岩波書店, 2002 年) 参照。
- 61) 同上, 229 頁 (p.176)。
- 62) 村上泰亮「あふたあ・へげもにー」『中央公論』1985 年 11 月号。
- 63) エレン・メイクシンズ・ウッド 中山元訳『資本の帝国』(紀伊国屋書店, 2004 年)。
- 64) 同上, 204 頁。
- 65) 同上, 205 頁。
- 66) 同上, 209 頁。
- 67) 同上, 229 頁。
- 68) 同上, 246 頁。
- 69) 同上, 257 頁。